

トレンド提言

—オリンピックから学ぶ—

「乙女らは 舞い跳び廻り 美に向う 愛の微笑み 乱世つつまん」

「この春や ゆずる 結弦に なお 奈緒に 感動メダル 苦難のりこえ 栄光つかむ」

○平和とオリンピック

冬季オリンピックが韓国平昌で開催された（2月9日～25日）

参加国は92ヶ国・地域と史上最大だった。各国各民族はアスリートの超人的競技・演技に感動を覚え、勇気を得ようとする願いとともに「平和の祭典」を通じて、世界平和の実現に切なる期待を寄せていることがうかがえた。

唯一、東西冷戦構造の残滓が見られる韓国と北朝鮮の首脳もこの機会に会食・懇談し、握手した。

北朝鮮金正恩氏からの親書（北朝鮮への招待）が、金与正特使（正恩氏の妹）より韓国文在寅大統領に手渡されたという。

一方、安部首相は金永南最高人民会議常任委員会委員長という北朝鮮最高幹部と同席しながら立ち話程度だったようだ。「拉致問題」という難題解決のためにも、あらゆる機会を活用しようという知恵はなかったのだろうか。対話をしようとするスタンスは当初から無かったのか。

トランプ大統領にいたっては平和の祭典の最中に、小型核兵器開発を表明するなど「目には目を」の思想による軍事力強化策を打ち出している。

ちなみにこの件に関しては河野外相は賛成、ドイツのガブリエル外相は反対だ。今や力による解決を目指しているのは日米首脳だけではないだろうか。

北朝鮮の「微笑み外交」を一笑するのではなく、対話外交に次元を高めることに専念する絶好の機会とみるべきだろう。世界の世論はそれを求めている。

“オリンピックに政治を持ち込むな”と言われるが、少なくとも米日の首脳は、政治的、軍事的視点をもったアプローチに見えた。

朝鮮半島の南北分断は、歴史的には米ソの第2次世界大戦後の戦後処理策に起因する。戦後73年経った今日、米ソ両大国は同一民族である南北朝鮮の自主的統一の動きに干渉したり妨害すべきではあるまい。

北朝鮮の核開発・保有については許すことはできないが、何が彼をそうさせているのかについても考えてみるべきではないだろうか。

日米韓という「同盟関係」を固定化しつつ、善と悪とに単純に決めつけ、経済的包囲網強化、力の政策で押し通す米国主導の西部劇的発想で事態は前進するだろうか。韓国大統領の融和策も全面否定するのではなく窮余の一策として容認出来ないのか。大局観に立ち、多面的に検討してもおかしくないと思われる。

冷戦時代終結後30年の間、米国はイラク・アフガンへの大義なき攻撃を重ねてきた。オバマ前大統領は「世界の憲兵」を辞め軍縮を宣言した。

ところが、この1年トランプ大統領はオバマ前大統領の実績を否定することに躍起になり、軍需産業をバックに軍備拡張を公然と宣言し、軍需景気に支えられている。そこには人権思想もヒューマニズムも見られない。

トランプ大統領の言動に最も忠実な政府は残念ながら日本政府ではないだろうか。オリンピック開催の機会に日本国民もスマホに溺れることなく、内外の動きに目を見張ることが求められている。

○オリンピックの原点は伝承されているか

・オリンピックは「平和の祭典」とも言われている。だが、以下にみられるように近代オリンピックの歴史は原点を忘れてきた。

そもそも発祥（古代オリンピック）は、古代ギリシャのオリンピアで、各都市国家間の平和と災害を除くために行なわれたとされる。古代オリンピックは1000年以上の長い期間にわたり続けられたが、古代ローマがキリスト教を国教と定めてから次第に衰退し、ローマ帝国の末期に禁止されている。19世紀になってギリシャが独立したとき、記念事業として復活したが、わずかに4回開かれただけで再び中止されている。

近代オリンピックが古代オリンピックに学ぶべき点は、古代オリンピックが4年毎の開催を厳格に守ってきたことではないだろうか。古代オリンピックは西暦393年まで293回の大会を開催しているが、この間、内戦や外敵の侵入があった場合でも、オリンピック開催期間中は武力を行使しなかったという。それは古代オリンピックが原始宗教から成長したものであり、神への恐れと信仰がオリンピックを絶対神聖なものとしたためだとされる。後のマケドニアのアレキサンダー大王やローマのネロ皇帝もオリンピック祭典は存続させたのである。

- ・一方、近代オリンピックをみると、1916年第6回大会（ベルリンの予定）は第1次世界対戦で、1940年の第12回大会（東京の予定）は日中戦争、第2次世界大戦で、1944年の第13回（ロンドンの予定）も同じく第2次世界大戦で中止され、1980年のモスクワ大会、1984年のロス大会は東西冷戦時代の政治情勢の影響で不参加国を多数出すという不幸な歴史を持っている。
- ・今回のオリンピック開催中は幸いにして北朝鮮の核実験なし、米韓の合同軍事演習も中止となった。

○金メダル1個に対する報奨金（2012年のオリンピック）

・イタリア	1,500万円	・ロシア	1,000万円
・フランス	400万円	・日本	300万円

- ・韓国では、金メダリストには兵役免除、生涯賃金の保障もあると伝えられている。
- ・中国では優れたアスリート育成は重要な国策になっている。特に北京オリンピックは重視され、約1兆円の予算が計上されたときく。正に国家資本主義とでも言えようか。
- ・多民族国家アメリカではスポーツは選手個人中心主義、他国に比べて国の関与はみられない。だが、スポーツ用品メーカー、各種企業がスポンサーとなる。メダリストたちはその広告塔の役割を担う社会。提供される金額は億円～数十億円単位という。
- ・大切なことは、国や企業が選手を利用するだけ利用して使い捨てにすることがあってはならないことだ。特に選手の引退後の保障が求められる。

以上のようにオリンピックは国にとっても関係企業、マスコミにとっても一大イベントなのである。メダルの数は国力を反映するように描かれている。

では、選手たちはどうなのか？

競技に勝ちたい、メダルを獲りたいという一心で努力することは結構なことだが、中には薬物の利用、ドーピングなるものに填まる者も後を絶たない。本来の人力と他力の活用とを区別するのは難しいとされる。（食物、飲み物、着衣、塗りもの、スパイク等）現状では、禁止薬物がリストアップされている。

○冬季オリンピックの課題

近代オリンピックの父とされるクーベルタンは「オリンピックは参加することに意義がある」とされた。だが現代オリンピックはだれでも参加することはできない。選手となるためには様々な難関がある。特に冬季オリンピックを見てウインタースポーツに関して多くの課題があるとみた。

- ◇夏場のスポーツは素手でも裸足でもやれる。貧しい家庭からでも一流のランナーは生まれる。だが、ウインタースポーツはそうはいかない。スキー・スケートはスキー板・ストック・靴が要る。用具はいずれも高価だ。練習場も空き地や野原というわけにいかない。スキー場は近場にはない。スケートリンクは少なく、使用料も高い。「スケルトン」や「カーリング」にいたっては一般人には手が届かない。

筆者の中学生時代の友人は大阪の印刷会社に嫁ぎ、2人の息子と娘に恵まれた。この子らはスケート選手を目指したが練習場に不自由し、かつての西武のリンクを紹介したことがある。後にこの2人はNHK杯で入賞したが夫の死亡で支えきれずスケート選手の道を断念した。今回の平昌オリンピックではアイススケートの審判員をしている。当時、彼女は「スケートは金がかかる。庶民はついていけない」と述懐していた。

この点、北欧諸国やカナダなどでは、ウインタースポーツは国策的に厚遇されているようだ。参加92ヶ国、地域の中でイコール・フットイングの競争が行われるわけではない。

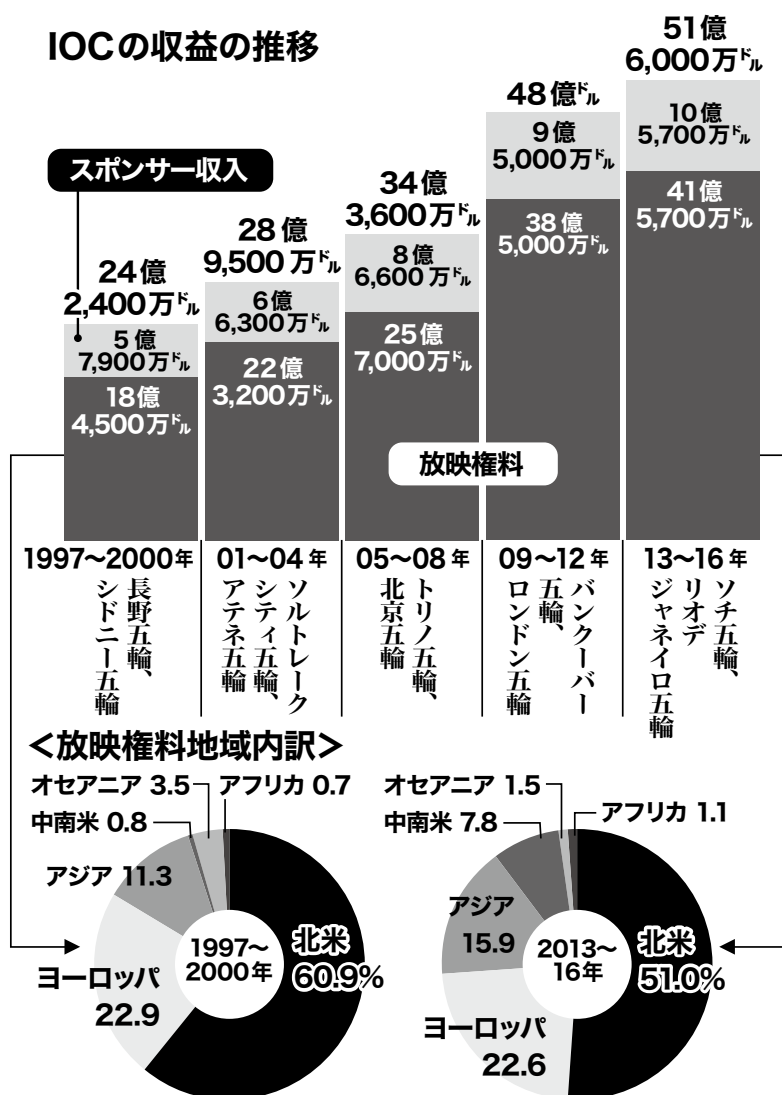
- ◇プロスポーツ選手として生きていくには強力なスポンサーがいなければやっていけないことは常識となっている。オリンピック選手は本来アマチュアスポーツのはずだが現状ではプロと同様になっている。
- ◇「SPORTS」は運動と訳されているが、娯楽・楽しみという意味もある。古くは王侯貴族など支配者の娯楽だった。現代社会ではどうだろうか。
- ・アスリート自身からは「楽しみながらやる」という声が聞かれる。大いに結構なことだ。だがその実態はスポーツが競技・競争となり、負けてはならぬ、勝つことだ、ということが社会的プレッシャーとなっていることは否めないだろう。こうした厳しい条件を克服して日本の選手はスケート（フィギュア・スピード）スキージャンプなどで感動的な力を発揮した。
 - ・応援する人、観戦者は、選手の苦難奮闘と一体となる人、無責任なる者と

あわせて、概ね娯楽・趣味として楽しんでいるようだ。

- ・現代社会ではスポーツは大なり小なりイベントとして成り立っている。これを支えるのは選手、観客の他に選手を管理・指導する企業や団体、設備を建設し提供する事業、そしてスポーツメーカー、報道機関等があり、さらに政治家が関与するケースもある。オリンピックでは国際オリンピック委員会を頂点とした機構がある。ここでは複雑な利害が絡み合い、政治的・経済的利権が飛び交っているとみられる。あらためてこの機会にSPORTSのあり方を確かめ糺したいものだ。

○選手より放映権優先のIOC

1例をあげると、2月16日のフィギュアスケートは午前10時に始まる一方で、ノルディックスキージャンプは午後9時半に開始され、終了が日付を越えた。競技日程は国際オリンピック委員会（IOC）の収入源となるテレビ放映権に配慮したものだ。その証はIOCが平昌五輪に合わせて発表した収益状況にみられる。2014年ソチ五輪と16年リオデジャネイロ五輪が開催された13～16年の収益は計51億6000万ドル（現在のレートで約5676億円）で過去最高となった。収益の内訳はテレビ放映権料が約80%を占めて41億5700万ドル（約4573億円）、スポンサー料10億300万ドル（約1103億円）。テレビ放映権料の最大の顧客は約51%を占める米国で21億1900万ドル、2番目が欧州で約23%の9億4100万ドルだった。



○オリンピック雑感

- ・予算国会開催中だがマスコミは連日国別メダル数にこだわり放送した。わが家でも日本選手を応援し続けた。選手の美技、特技に感動することは当然だが「日本」に固執するのはオリンピック精神に反しないか、ミニナショナリストなのか、国威宣揚に加担しているのではないかと自問自答する。
- ・安部首相は金メダリスト羽生・小平選手に電話したことが放映された。両選手の粘り強い労力の積み重ね、謙虚さ、利他の美学、そして金メダルに、感動に学ぼうというのか？それとも地位利用による政治的影響を狙ったものなのか、その意図は不明だがメダルの色を灰色に変えてはなるまい。
- ・羽生選手、小平選手はいずれも「自分に勝てた」ことを誇りとしている。ケガに泣き、不振を克服した彼らに敬意を表したい。彼らが苦難の最中に激励の電話をするならともかく「結果」だけを我がものとするご都合主義は恥ずかしいことだ。

オリンピックメモ

○女子の参加

オリンピックでの女子の活躍はめざましい。

だが、女子の参加は第1回(アテネ 1896年)では禁制。第2回(パリ 1900年)から。

○マラソンの起源

・起源約 2500 年前。ギリシャ軍の勝利を伝えに、伝令が「マラトン」(マラソンの語源)〜「アテネ」間約 40 キロ走行(後に測定の結果 42.195 キロ、第4回大会から採用)

・オリンピックでの採用、1896年(第1回)

・距離：現在 42.195 キロは、第4回(ロンドン 1968年)から—それまではまちまち

○冬季オリンピック

俗にオリンピックと言えば夏季五輪のことだが、冬季五輪もある。

第1回は 1924年にシャモニー、フランスで開催された。この大会も第5回(1940年、日本、スイス、ドイツ予定)、第6回(1944年イタリア予定)が第2次世界大戦で中止されている。日本での開催は 1972年(札幌)、1998年(長野)である。

○パラリンピックの歴史

第1回は 1948年、ロンドンでの2回目のオリンピック大会の時期に合わせて、第2次世界大戦で負傷した 16人の脊髄損傷患者たちのリハビリ目的で始められている。これを主導したのは、ナチスによるユダヤ人排斥運動で英国に亡命した医師、ロードヴィッヒ・グッドマン。

彼は「失った機能を数えるな。残った機能を最大限に生かせ」との名言を残している。

正規にパラリンピックとなったのは 1960年のローマ大会から。

日本の初参加は東京大会の 1964年。

